テイク・ファイブ　Take Five

――デイヴ・ブルーベック・カルテット《タイム・アウト》から

（ポール・デスモンド作詞、作曲）

東京都墨田区立吾嬬第二中学校教諭　長谷川要子

学習指導要領から共通教材がなくなった今、鑑賞教材としてどんな曲を選んでいくか、日々（？）悩みは尽きません。『春』、『魔王』、『交響曲第５番』、『越天楽』、『六段』、『勧進帳』は今でもやはり鑑賞教材の王道としてぜひ取り上げておきたいのですが、より広い音楽的な視野を養うためには、他にも様々なジャンルの楽曲を鑑賞させたいものです。生徒の音楽的な感性を刺激するような新鮮さをもった曲、しかし授業数を考えれば、あまり大がかりな曲ではなく…、このへんが鑑賞教材を選んでいくポイントでしょうか。

さて、今回取り上げるのは、デイヴ・ブルーベック・カルテットの『テイク・ファイブ』です。ＣＭでも使われておなじみですが、発表は1959年ですから、50年近くも長く愛されてきた曲です。モダン・ジャズのおしゃれでクールな雰囲気、しかし耳に心地よいオーゾドックさも持

ち合わせ、中学生にも親しみやすい曲です。そして何といって魅力的な教材性を豊富にもっています。

＊

【教材性①：変拍子】 この曲はご存じのように３＋２の５拍子です。生徒が接するほとんどの合唱曲、鑑賞曲が４拍子系であるのに対して、５拍子のこの不思議な浮遊感。授業での投げかけは、「この曲は何拍子でしょうか？」というシンプルなもので十分です。生徒は集中して聴き、５拍子という未知の世界と出会って感動を覚えます。「５拍子の曲ってあるんだ～！」。続いて、ホルストの『火星』（３＋２の５拍子）、チャイコフスキーの『悲愴』第２楽章（２＋３の５拍子）、『展覧会の絵』のプロムナード（５拍子＋６拍子）、『春の祭典』（いろいろ！）、映画『ミッション・インポッシブル』のテーマ（５拍子）、『ゴジラ』のテーマ（２拍子＋２拍子＋５拍子）と、生徒を変拍子づけの世界に誘うのはいかがでしょう。

【教材性②：サックス】 鑑賞の授業でサックスという楽器についてとり上げる機会がなかなかないのは残念なことです。

この曲の冒頭、ジョー・モレロのドラムとデイヴ・ブルーベックのピアノが５拍子のリズム・パターンを刻む中、旋律を奏でるのがポール・デスモンドのアルト・サックスです。メタリックでありながら微妙な哀愁をたたえたサックスの魅力を中学生なら十分に感じ取れるようです。吹奏楽部のサックスの実物を見せたり、関連教材として『レフト・アローン』（マル・ウォルドロン）を聴かせたりして、さらに関心を高めます。

【教材性③：アドリブ】 この曲のオリジナルはアルバム《タイム・アウト》に収録されているものですが（SRCS-9631。他の収録曲もほとんどが変拍子）、その後に収録されたライブ盤などでは、中間部の違ったアドリブを聴くことができます。また、実に様々な演奏家（女子十二楽坊も！）がこの曲を取り上げているのを聴き比べるのも楽しいものです。こうして幅の広い料理のされ方をしていることこそが、この曲のもつ魅力を語っているといえるでしょう。

＊

さて、ところで私も、いつか、と思いながらまだ実行に移していないのですが、たとえば休み時間に、モダン・ジャズが流れているような音楽室って、ちょっとかっこいいとおもいませんか。